

二〇一九年度 入学試験問題

国語

第二回

【注 意】

- ・試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・問題は一ページから六ページまでです。
- ・解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- ・字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「問題は地域に入ってくるお金が少なすぎることはない！」と、英国のロンドンに本部のあるNew Economics Foundation (通称NEF) が打ち出したのが、「漏れバケツ」理論という概念です。

地域を「バケツ」だと考えてみましょう。そのバケツにできるだけたくさんのお金を注ぎ込もうと、A、「地域にお金を引っぱってこよう」と、政府からの交付金や補助金のほか、企業誘致、観光客の呼び込みなど、各地域は懸命に努力をしています。

B、そうやってせっかくな地域に引っぱってきたお金の多くが、次の瞬間には地域外に漏れ出ていないでしょうか？ 補助金で行ったケンセツ工事が地域外の業者の手によるものだったら、その工事費用の大部分は地域外に出て行ってしまいます。企業誘致をしても、その原材料や販売・メンテナンスなどの関連企業が地域になければ、C、せっかくのお金も「素通り」していってしまうでしょう。従業員として地元の人を雇用している

なら、その給与は地域に入りますが、その従業員が地元の商店ではなく、郊外にあるダイキボショッピングセンターで買い物をするとしたら、従業員を「通り抜けて」、やはり、そのお金は地域の外に出て行きます。観光客を呼び込んで、土産物を買ってもらったとしても、その土産物が地域外や国外でつくられたものであれば、やはりお金は地域にとどまりません。

この「漏れバケツ」モデルを打ち出しているNEFの資料(2002年)には、「漏れバケツ」の具体的な例がいくつか挙げられています。

D、英国のあるトヨタの工場では240社から部品を調達しているそうです。でも、そのうち地元の業者はたったの5社だけとのこと。スコットランドの電機メーカーの事例も、同じストーリーです。そこで使っている金属部品のうち、スコットランド製のもの12%にすぎなかったとのこと。他は全部、域外からの調達です。工場を誘致したことで、地域にお金を引っぱってこることができていても、部品代金を支払うときに、あつという間にお金が地域外に出て行ってしまうことがわかります。

日本の国内でも、同じ状況があちこちで見られます。地方でコウキヨウ事業などのプロジェクトが行われても、地元地域とは関係のないゼネコンが工事を受注し、資材を調達することが多々あります。東京に本社を置く企業が受注すれば、地域に投資されたお金も東京に戻ることにになり、そ

の地域の経済力を高める効果は限定的でしかないという状況です。

バケツの例に戻りましょう。バケツに水を入れても入れても、バケツに穴がいっぱい空いていたら、⁽¹⁾ 水は流れ出てしまい、バケツに水はたまりません。そういう状況に⁽²⁾ チョクメンしたら、どうしますか？

そう、ここでの解決策には2つあります。「水を注ぎ入れるペースをアップする」か、「バケツの穴をふさいで、水が流れ出るペースを遅くする」か、です。おそらく多くの人が、「さらにがんばって水を入れる」ことより、「バケツの穴をふさいで」ことが先決だ、と考えるのではないのでしょうか？ バケツの穴をふさいげばふさいぐほど、残る水の量は増えるでしょう。穴をふさいで流れ出る水の量を減らせば、そんなにがんばって水を注ぎ入れなくてもすむかもしれません。

地域経済も同じです。いくらお金を地域に「引っぱってくるか」「落とすか」ではなく、「地域からのお金の流出を減らす」こと、つまり、「いったん地域に入ったお金を、どれだけ地域内で循環し、滞留させるか」が大切なのです。当たり前といえば当たり前ですが、これまでは、「いかに地域にお金を持つてくるか」ばかりに目が行っていて、「いかに地域から出て行くお金を減らすか」はあまり考えられてきませんでした。その重要性を、バケツというわかりやすいたとえを通して、直感的に伝えてくれるのが、「漏れバケツ」モデルなのです。

「漏れバケツの穴をふさいぐ」とは、各地域経済が自給自足して、相互のやりとりがなくなる孤立状態をめざしているのか？ それが良いのか？ 地域分業による効率をどう考えるのか？ と思う人もいるかもしれません。

そうではありません。漏れバケツモデル(と本書)がめざしているのは、地域経済の完全な自給自足や孤立ではありません。日本という国を、大小さまざまな地域バケツがつながっているものとしてイメージしてみてください(さらに言えば、日本も1つのバケツで、他の国のバケツとつながっています)。日本の中で、いちばん大きなバケツは「東京」でしょう。その「東京バケツ」から、たとえば、鳥根県の海士町という小さな「海士町バケツ」に、補助金や交付金、観光客がやってきて島で使うお金という形で水が注がれます。でも、「海士町バケツ」にはいっぱい穴が空いていて、せっかく注いだ水も、その多くはあつという間に、業者や土産物の製造者の多い「松江バケツ」に流れていってしまいます(松江は海士町から本州に渡ったところにあります)。そうして、さらにその多くが最終的には、「東京バケツ」

に戻っていきま。

本書が伝えたいと思っているのは、地域経済間のつながりとやりとりはこれからも重要であり続けるけれど、いまの地域経済の穴は大きすぎ、多すぎるのではないか、それを少しでもふさぐ努力をすることで、地域経済に残るお金が増え、地域経済の活性化や地域の人々の幸せにつながるのではないか、ということですか。「100%の自給自足」など不可能ですし、たとえ可能であっても、望ましいわけではないと考えています。また、たとえば、「東京バケツ」が穴をすべてふさいで水が流れ出なくなってしまうたら（それは不可能なことですが！）、⁽³⁾東京はともかく、他地域は困ってしまいます。

漏れバケツモデルを提案しているNEFも、このように述べています。「（私たちが提案しているのは）地域を外側の世界とのつながりから遮断しようとするツールではありません。むしろ、政府や企業による投資であろうと個人消費であろうと、地域内へのあらゆる投資を最大限に活用するために、地域のつながりを高めるものです。これによって、その地域はより豊かになりますし、それによって、欲しいのに地元では手に入らない品物やサービスも、よりよい形で他の地域から買えるようになるでしょう。自給自足や(4)がよいと言っているではありません」「私たちのツールは主に、より貧しい地域のために設計されています。実際、より豊かな地域がすべての漏れ口をふさいでしまうと、大きな問題になるでしょう。より貧しい地域にお金がまったく流れ込まなくなるからです！ また、より豊かな地域の漏れをふさぐと、採用が難しくなったり、住宅価格や^(イ)チンギンが高騰したりといった「過熱」の問題も引き起こす可能性があります。そこで私たちは、より豊かな地域の人々には、参加したいのであれば、近隣のより貧しい地域と協力するよう勧めています」。

人も地域経済も、「まずは依存から自立へ。自立してこそ、相互依存という最も豊かな状態に向かうことができる」のではないのでしょうか。人に頼り切っている状態（たとえば、中央からのお金に頼っている地域経済）は脆弱です。相手に翻弄されてしまうからです。今まさにそうなりつつあるように、地方への交付金や補助金が減っていく時代、地域経済や地域の幸せの外部依存度を下げ、自給自足率を上げていくことが、地域のレジリエンス（しなやかな強さ）につながります。そうして、他に翻弄されない強さが生まれ、自分たちの足で立つことができるようになる。そうなっ

じめて、ある程度自立した地域同士がさまざまなものを相互に交換し交流するという、安全・安心な豊かさを創り出すことができると思っております。

（枝廣淳子「地元経済を創りなおすー分析・診断・対策」）

★メンテナンス……機械・建物などの維持、管理。

★ゼネコン……建築や土木工事などを行う大手建設業者。

問一——(1)「水は流れ出てしまい、」とありますが、これは、具体的にはどのような状況ですか。解答らんに行以内で答えなさい。

問二——(2)「水を注ぎ入れるペースをアップする」とありますが、具体的にはどうすることですか。解答らんに行以内で答えなさい。

問三——(3)「東京はともかく、他地域は困ってしまいます。」とありますが、地域同士がどのような関係になるのがのぞましいのでしょうか。解答らんに行以内で答えなさい。

問四——(4)に入れるのにふさわしい漢字二字のことばを文中から抜き出しなさい。

問五——この文章は二つに分けることができます。後半の最初の五字を抜き出しなさい。（読点やかっこなどがあれば字数に入ります。）

問六——A、Dに当てはまる語を次のア、エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。（ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。）
ア たとえば イ しかし ウ つまり エ やはり

問七——(ア)～(オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 地域のなかで工事が行われても、労働者が地元の人であれば、多くの人々が疲労するので地域のためにならない。

イ 地域経済を「バケツ」によって説明したのは、都市と地方の豊かさの格差が水の量のイメージで直感できるからである。

ウ いまの地域経済は、地域に入ってきたお金があまり残らずに出ていくので、それを少しでも減らすことが課題である。

エ 地元には工場を誘致した場合、一時的には地域経済は活性化するが、長期的には地方の個性が薄らぎ失敗することがある。

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

土曜の早朝、歩は文具店へボール紙とポスカを買いに出かけた。晃と稔に小道具制作の件を持ちかけると、せば土曜に歩の家で小道具は仕上げるべ、と晃は言った。確かにそれくらいししないと、本番までに仕上がらない。文具店からの帰路、歩は国道の途中で自転車を停めた。黄緑の点線だった水田の稲が、いつの間にか自分の膝下ほどにまで成長している。朝陽の中に細長い緑葉が揺れ、眩い光を弾いていた。(1) 初めてこの土地を訪れたとき、その場所はただの泥土だった。

三月末、日の出前に東京のタワーマンションを出て、父の車で八時間は高速道路を北上したように思う。高速を降りる頃はもう午過ぎだった。国道を走るうちに、住宅や店舗は疎らになった。路傍にはそこかしこに雪溜まりが残されていた。途中、給油機が二台しかない山裾のガソリンスタンドを過ぎると、あとは森ばかり続いた。幾つかのトンネルを抜け、幾つかの峠を越え、蛇行した道路を上り下りし、次第に山のどの辺りを走っているのか分からなくなった。殆ど人の手がつけられていない原生林が続く。この山脈の向こうに、人が住んでいるとはとても思えなかった。

三つか四つの山を越えた後に、眺望が開け、左手に山の傾斜、右手は谷間といった舗装路を進み、ようやく人の手のつけられた自然が現れる。山の斜面の杉が伐採されていたり、平原に冬枯れの樹木が一行に並んでいたりする。ガードレールに赤い実の絵が描かれているので、平原の樹木は、林檎の果樹らしかった。(2) こんな山間の谷奥に、人が住んでいることが不思議だった。稲作ができる面積も少ないし、石炭や銅といった資源が採掘できるところでもない。平野の広がる市街地のほうがよっぽど住みやすい。この土地で生活を始めた最初の一家は、なぜこんな不便な場所に居着いたのだろう。隣でハンドルを握っている父に訊いてみるが、父も首を傾げている。すると母が後部座席から、少し浮かれたような声で、

「住めば都々になったんじゃないかしら。」

どの土地も「都」にならなかつた母が言うので、歩は何も答えられずに微笑を浮かべるばかりだった。やがて国道右手に田園地帯が見え始めた。水田は、長方形の黒い泥濘だった。その泥土の中途に、一羽の白鷺が居た。細長い二本足を泥に刺して、西の方角を向いて佇んでいた。

あの泥土に、今では規則正しく稲が植えられ、初夏の風に緑葉を揺らし

30

25

20

15

10

5

ている。この土地の実りは八月だろうか、九月だろうか、歩はふと、目の前の田園地帯が黄金色に染まり、撓わに稲穂を垂らす光景を想像した。こうした山間の土地でも、稲は成長し、野菜は育ち、果樹には実がなる。やはり最初の一家には、この土地が「住めば都々」になったのかもしれない。

午前九時を過ぎた頃に、自宅玄関の呼び鈴が鳴った。玄関には、晃と稔が並んで立っていた。母に迎え入れられて、二人が居間へと上がる。歩はこの二人が自分の家にいることが不思議だった。街中で偶然に家族を見たときにも似た違和感を覚えた。三人は仏間の隣の、日当たりの良い畳部屋で工作をした。晃が布切れやロープで白象の鼻や尻尾を作る。稔がヘアバンドにボール紙を取り付けていく。それはやがてオツベルの犬の耳になる。歩は月の仮面に、黄色のポスカで色を塗っていた。

黙々と作業は続いた。その甲斐もあって、正午が過ぎる頃には殆どの小道具が仕上がった。その頃に母がやってきた。襖から半身を覗かせたエプロン姿の母は、昼食を作ったからどうぞ、と言う。歩達三人は、工作道具を手にしたまま、無言で顔を見合わせた。居室の襖を開けると、座卓には唐草模様の深皿が三つ並んでいた。母がよく作る、茄子と油揚げのそうめんだった。

座卓の前に座り、三人でそうめんを啜った。歩は揚げを一口食べた後に、居室の角のテレビを眺めた。午のニュースが放送されており、午後の天気を伝えている。それからまた正面を向いた。晃と稔が、自分の家の居間でそうめんを啜る姿が不思議だった。母は順番にコップへ麦茶を注いだ後に、歩の左隣の座布団に腰を下ろした。昼食を作って貰っておいて何だが、今は母によそへ行って欲しかった。

「晃君も、稔君も、ずっとここに住んでいるの?」

母の問いかけに、晃と稔は深皿から同時に顔を上げた。自分には関係のないことなのに、歩の持つ箸は止まった。箸の先から、するとそうめんが落ちていく。口を開いたのは晃だった。

「そうですね。A 俺達は、幼稚園から中学校まで、ずっと一緒です。」

「じゃあ、二人は幼馴染なのね。」

母は困ったような微笑を浮かべ、首を傾げた。湯上がりの河辺で見た、父の仕事と同じだった。

「歩君は中学校を卒業したら、また引越しをするんですか?」

「うちは転勤族だから。ようやくその土地に馴染んだ頃に、出て行かなく

60

55

50

45

40

35

てはならないの。」

歩はそんなやり取りを見ながら、晃が標準語を話していることにも、真つ当な受け答えをしていることにも、些か驚いた。稔はというと、二人の会話に気を取られながらも、黙々とそうめんを啜っていた。晃は茄子を摘まんだ後に、

「こういうそうめんは初めて食べたけれども、美味しいですね。炒めた茄子にも、油揚げにも、味がよく染みていて。」

それを聞くと母は、⁽⁵⁾ 今度は確かな微笑を浮かべて、

「私が生まれ育った街の、郷土料理なのよ。」

昼下がりにすべての小道具を作り終えた。小道具を詰めたりユツクを背負って、晃と稔は杉木立の坂を降りていった。二人を見送った後に、ちよつとやんちゃそうに見えたけど、しつかりした子ね、と母は言った。それを聞いて、大人も簡単に騙す晃に舌を巻いた。騙す——？ 晃が母を騙す必要など、どこにもなかった。

二階の自室へ入り、窓を開けると、坂の下の杉木立の陰に、未だ晃と稔の姿が小さく見えた。二人で何か話している。何を話しているのだろうか。耳を澄ませてみても聞こえてくるのは、納屋で鳴いているらしい首蟋蟀のジイという響きだけだった。二人の会話は、随分と長く続いた。歩は次第に、自分や母の悪口を言われている気がしてきた。よそ者の自分や、風変わりなそうめんを作る母の、悪口を言っている。

晃がリュックから象の尻尾を取り出し、毛糸で作った尾毛を指差す。単に小道具の出来映えを語っているだけらしい。 **B** 二人は三叉路で別れ、お互いが違う方角へと歩いていった。その頃にはもう、納屋の首蟋蟀の音も途絶えていた。

納屋は、前庭を挟んで、自宅の斜向かいにあった。木造二階建てで、赤トタンの屋根に、黒ずんだ杉板の壁面、同じく黒ずんだ杉の支柱——、ある土曜の午後、母に誘われてこの納屋に入った。納屋には実に様々な形の農具が、乱雑に収納されていた。鍬や鋤や臼くらいなら歩にも分かるが、二本の竿竹が連結したものや、木製の自在箒のようなものなど、名称も用途も全く不明な農具も多くあった。母は信州の田舎育ちで、 **C** 母の実家も農家だったので、殆どの農具について知っていた。歩の矢継ぎ早な質問に、それは唐竿で、そっちは八反ずり、母はいくらか得意げに答えてい

95

90

85

80

75

70

65

た。

歩は農具を物色するうちに、ある言葉を見つけた。棚上に横たわる、太い胴回りの木槌の持ち手に、豊かな沈黙と手彫りの文字が記されていた。農具の持ち主が彫ったならば、それは歩が目にした、この家に棲んでいた老夫妻の唯一の言葉だった。 **D** 意味が分からない。豊かな言葉、なら分かるが、沈黙は無言なわけで、無言が豊かとはどういう意味だろう。母に訊くと、その農具は横槌と言いい、藁打ちに用いるという。手彫り文字については、母も首を傾げるばかりだった。

納屋には、骨董品のような物も多く仕舞われていた。白磁の花瓶、素焼きの壺、虎の絵の掛け軸、錆びたカンテラ、手巻式の懐中時計、三菱製の足踏みミシン——、数本の日本刀まで出てきたときには驚いたが、鞘から抜いてみると、刃のない模造刀だった。それでも随分な重さがあり、歩の足下は覚束なかった。

母はとある段ボールから、金物の皿を取り出し、懐かしい、チャップパがある、と洩らした。よく見ると皿ではなく、シンバルの形をした楽器だった。持ち手には赤い房が付いている。シンバルのように打ち鳴らすのではなく、擦り合わせて音を出すという。母の祖父、歩から見ると曾祖父が、チャップパを持って地元の祭りに参加していたという。神主が放った大豆入りの麻袋を、半裸の若者達が奪い合う意味不明の祭りだったと、母は笑った。きつと麻袋を手にした人の家は、その年の ⁽⁶⁾ 五穀豊穡が約束されるんだよ、歩が言うと、確かにそうかも、と母は感心した。奪い合いをできるだけの若者が村から居なくなつたので、その祭りはもうない。

★せば……では。

(高橋弘希『送り火』)

115

110

105

100

問一

——(1)「初めてこの土地を訪れたとき、その場所はただの泥土だった。」とありますが、この土地に来たときの歩の状況はどのようなものですか。次のア～エの中からふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父の車で北上を続けるうちに偶然辿り着いたが、人の気配がまるでしない原生林の神秘的な様子を母が気に入り、この土地に家族で移り住むことを決めた。

イ 東京から越してきたときは冬で、枯れ木や何も植えられていない水田ばかりの殺風景な様子が目立っており、とても人が住んでいようには思えないという印象を受けた。

ウ 豊かに水を張られた初夏の水田が人気がない中でひっそりと存在していて、そこに佇む白鷺の姿に胸を打たれた。

エ 東京から逃げるようにいくつもの山を越えて、一家でさまよっていたところ、人の気配がしない田園風景の様子に、最初に生活を始めた一戸に自分たちを重ねた。

問二

——(2)「こんな山間の谷奥に、人が住んでいることが不思議だった。」とありますが、これはどういうことですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問三

——(3)「歩は何も答えられずに微笑を浮かべるばかりだった。」とありますが、これはどういうことですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問四

——(4)「母は困ったような微笑を浮かべ、」とありますが、なぜそのような表情をしたのですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問五

——(5)「今度は確かな微笑を浮かべて、」とありますが、この時の母はどのような心情ですか。次のア～エの中からふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の生まれ育った街の郷土料理を褒められたことを、誇らしげと感じている。

イ やんちゃに思えた晃と稔の真つ当な受け答えを、気持ちいいと感じている。

ウ 自信の無かった手料理を褒められたことを、嬉しさと感じている。

エ 田舎料理であるそうめんを喜ぶ幼い反応を、可愛いと感じている。

問六

——(6)「五穀豊穡」とありますが、食べ物を使った次の一～五の成句の意味を後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 絵にかいたもち

二 みそをつける

三 とんびに油揚げをさらわれる

四 朝めし前

五 丸い卵も切りようで四角

【意味】

ア たやすいこと。

イ 大切なものを突然わきからうばいとられること。

ウ 見たところほりっぱだが、じつさいには何の役にも立たないこと。

エ 失敗すること。

オ ものごとは、言い方や、やり方によって、おだやかにいくこともあれば、けんかになることもある、ということ。

問七

【A】 【D】 に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア だから イ しかし ウ また エ やがて

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 歩は何もない土地でずっと暮らしてきた晃と稔を見下しており、常に一定の距離を保とうとしている。

イ 歩は小道具作りや学校での生活を退屈だと感じており、友人たちの前や納屋で一人浮かれる母のことを恥ずかしく思っている。

ウ 歩は晃と稔が本当は意地の悪い人間であることを知っており、自分たちの悪口をいつ言いつい出すかと、常に警戒している。

エ 歩は自分がよそ者である、土地に馴染んでいないということを感じており、晃や稔と完全には打ち解けられずにいる。

